



世界で一番
いいところ



greentea0117

世界で一番いいところ

私はとうもろこしを育てて生活している。かなり大きな畑だ。背は高い方だが、とうもろこしはもっと大きく育つ。収穫前のとうもろこし畑は、大きな壁のようだ。私はその中に入り込み、とうもろこしの育ち具合を見る。

いつものように畑で働いているとがさごそと葉っぱが揺れ、大きな麦わら帽をかぶった人物が現れた。すんでのところで私とぶつかるころだった。その人は、麦わら帽をもちあげると、「これはどうも」

と言って、畑を通り過ぎて行った。私はなんとなく違和感を感じた。あまり手入れされていないと見える口髭、薄汚れたランニング。怪しいと言う感じではないが、いまどきこんな格好をしている人はいない。

「あんた」

私は声をかけた。

「どこから来たんだ？」

「この畑の向こうからですよ」

男は畑の向こうを指差した。

「そうか」

ときどきここをとおりぬけていく輩はいる。でもめったにいない。いたとしても持ち主の私に気づかれないようにこっそり通って行く。この男はなぜこんなにもどうどうと、まるでここが道であるかのように歩いて行くのだろう。

それからしばらくして、収穫間近のとうもろこしを見ていると、同じ男が、今度は出て行った方から現れた。

「あんた一体どこから来たんです」

私は思わず聞いた。

「ちょっと用事がありましてね。それがすんで安心ですわい」

「それでどこへ行くんです」

「そりゃ元来た場所です。とうもろこしがよく育ってますな」

「ええ、まあ……」

「わたらの頃もよく育ちましたわい。ときどき畑を横切る人に会いました。わしも一体どこからきてどこへいく輩なのか、不審に思いましたわ」

「はあ」

「それではお元気で」

男はにっこり笑いとうもろこしの葉の奥へ消えて行った。

それから、七十年後。私はとうもろこしの葉をかき分け進んでいた。

「あんたどこに行くんだ？」

この畑の主と思われる男が聞いた。

「ちょっとやりわすれたことがあって」

私は言った。

「人に会いに行くんです。どうしても一言、言いたいことがあって」

「それはそうと、なぜうちの畑を横切るんだ？」

「気づけばここを通過していたんです。用が済んだらすぐに帰ります」

「その時もここを通るのか？」

「はあ。ここはいいところですね。世界で一番いいところです」